

自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー)+(Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価
			実践状況	実践状況
<b>I. 理念に基づく運営</b>				
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	開所より地域との連携の中で、人権を大切に、共に喜び合える、信頼の介護を理念としてきた。理念の実践に向けて、職員は毎年介護目標を立てている。今年度はレクリエーション活動に力を入れ、共に楽しみ、喜び合える場面が増えた。	法人の理念を基に毎年介護目標を立て、今年度は「レクリエーションの充実」と「感染症対策の徹底」に重点を置いている。理念や介護目標は玄関ホールや事務所内に掲示され、来訪者や職員が随時目にする事ができるようになっており、新規の利用契約時には利用者と家族にも説明するようにしている。また、年度末には介護目標の振り返りの時間をもち、それも踏まえたくうえで、職員全員で次年度の介護目標を設定している。
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	オープンガーデンの開放や恒例のサン祭り、ボランティア行事等は新型コロナウイルス感染症対策のため、全て中止にしている。	地元区へ協力費を納め、地域の一員として情報も得ている。例年であれば地域の文化祭見学や高校生の職場体験・傾聴・カラオケなどのボランティアの来訪、併設事業所と合同で行われる「サン祭り」を行っているが、今年度は感染予防の観点からすべて休止となっている。そのような中でも近所の方から野菜や果物の差し入れがあり、利用者と職員だけで祭りを実施し焼きそばやたこ焼きを食べたり、花火や盆踊りなどを楽しんだという。
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	職員は認知症サポーターとして、キャラバンメイトの活動を実施した。また、依頼があれば、出前講座で地域の人々に、認知症の理解、支援の方法を学んでいただいている。	
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	毎年、併設の小規模多機能ホームと合同で、年6回実施している。ホームの利用者の状況や行事の様子はサン祭り、クリスマス会、避難訓練の参加や見学を通して、理解を深めていただく機会があった。今年度は感染症対策のため、書面にて状況報告している。	2ヶ月に1回、家族代表、近隣住民、区長、民生委員、消防団員、市包括支援センター職員、法人関係者、ホーム職員が参加し、活動報告や利用者状況報告、事故・ヒヤリハット報告などを行い意見交換をしている。昨年12月には隣接する小規模多機能型居宅介護事業所との合同クリスマス会の見学もしていただいた。今年5月からは新型コロナ禍ということもあり、委員あてに書面で報告し意見・助言等を伺っている。また、会議録は開示され、会議に参加できない職員にも内容を知らせるようにしている。
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	市町村担当者への施設の空き状況の報告、入居者を受け入れる際の情報提供を受ける等、協力体制は整っている。また、職員は介護相談員の役割を学ぶ機会を持ち、理解を深めて訪問を受け入れている。	市の担当部署とは運営推進会議以外でも空き情報を始めとして様々な情報交換をしている。介護認定更新の際には調査員が来訪し、職員が必要な情報を提供しており、更新申請や区分変更の代行申請も行っている。また、例年であれば、年2回の介護相談員の訪問があり、利用者とコミュニケーションを図り、そこから得た情報を職員へ伝えている。更に、例年、認知症サポーターの出前講座も行っているが、今年度は新型コロナ禍のため中止となっている。

グループホームサン・オアシス

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介護保険法指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	身体拘束をしないケアに努めている。施設の玄関は安全に配慮し、施錠しているが、併設の小規模多機能ホームに自由に行き来出来るように、連絡通路は開放している。	安全面と防犯上の理由から玄関の施錠は行っているが、他の身体拘束にあたる行為は行っていない。外出傾向が強い利用者には話を傾聴したり、一緒に外へ出るなどして気持ちに寄り添うようにしており、転倒のリスクのある利用者には家族の同意の基、センサーを使用し、毎月の職員会議でアセスメントしている。また、身体拘束適正化検討委員会を年4回開催して内容を職員へフィードバックし、身体拘束や虐待防止に関する研修も年2回以上実施し、職員の意識の向上を図っている。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	身体的拘束適正化検討委員会を設置した。指針の整備について、そこで話し合われたこと等、職員間で周知徹底した。また、研修を実施して事業所内での学習を深めている。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	成年後見制度を活用している利用者がいた。後見人や家族の関わりを通して学ぶ機会があった。研修会の参加と施設内研修を実施して更に理解を深めている。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約内容の説明は、静かな環境で落ち着いて話ができるように配慮している。質問や介護への要望を確認している。料金の改定など、変更のある時は文章でお知らせしている。また、解約の必要な状況では、家族の意向を受けて、協力体制を整え支援するとともに、利用者の気持ちに寄り添うように努力している。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	家族の面会がある時、職員は積極的に話す機会を持っている。今年度は面会制限があるため、電話やメールでの確認が多い。介護相談員の訪問時は利用者一人ひとりとゆっくりと話していただく機会がある。意見や要望はスタッフ会議で検討してサービスに反映している。	ほとんどの利用者が自分の意見を表出できるため、普段の関わりの中で要望などを汲み取り、申し送りやスタッフ会議の中で共有するようにしている。新型コロナ禍以前は家族の面会が頻繁にあり、年1回開催される家族会や利用者の誕生日会の来訪の際にも意見を聴くようにしていたが、現在は電話やメールで意見を聴取したり、毎月発行しているホーム便り「サンだより」で利用者の日頃の様子を伝えている。また、利用者の中には以前身内がホームの利用者だったこともあり、職員との馴染みの関係が構築されており、細かい希望を出される方もいる。新型コロナ禍の中でも感染防止に努めながら、玄関ホールや外での短時間の面会を実施し、家族とつながりが途切れないようにしている。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の見解や提案を聞く機会を設け、反映させている	毎月実施しているスタッフ会議は、代表者を含めて全職員の参加を目標に決定している。項目を設けて意見や提案を出しやすくしている。職員が普段感じる不安や改善が必要と思うこと等、活発に意見交換し解決することが出来ている。	毎月1回スタッフ会議とカンファレンスを実施し、会議中は職員OBが利用者対応をしてくれるため、職員は集中して臨むことができる。会議では業務報告や行事予定、利用者に関わることなどを話し合っている。理事長も参加しているため、職員の運営に関する意見も直接提案することができる。また、職員は年度の目標設定や振り返りを行い、随時、施設長や理事長と話し合う機会がある。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	代表者は職員の得意なところで活動出来る機会を設け、係手当てとして反映させている。資格手当等、勤務体系の見直しをして、資格取得への意欲向上につなげている。		

グループホームサン・オアシス

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	全ての職員に研修を受けることを勧めている。希望する研修がある時は、それを優先している。今年度はPCカメラを設置してリモートでも参加できる環境を整えた。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	県や市で行っている研修会に参加しているが、今年度の交流会は感染症対策で中止している。ケアマネ会議はリモートで行った。		
<b>II. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援</b>					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	サービス導入に当たり一番大切にしていることは、利用者本人が利用を納得している事、それを家族に十分理解してもらうように努めている。サービス導入が必要な理由を利用者本人に家族と職員が同じ説明をすることで、不安を少なくしている。利用者の不安や心配なことは何かを知り、安心して利用できるように表情や話す内容等からも理解するように配慮をしている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	家族、利用者が共に納得し、施設入所が出来ることは、その後の利用者の生活において大事であることを理解していただいている。家族の状況や思いを受け止め、協力していただきたいことは明らかにして、力を合わせての関係作り心にかけている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	本人と家族の意見や要望は記録に残している。職員はカンファレンスで必要な支援について話し合っている。ありのままを記録に残して、利用者や家族が望む生活に近づけられるように、意見や要望は最大限サービスに反映している。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	職員は利用者と共に過ごす年月の中で、支えられ教えられることが多いことを知っている。利用者のありがたの一言や、その笑顔に支えられていると感じる職員は多い。「にやりほっと」の取り組みから、利用者の喜びや楽しみを共感することが出来た。職員も感謝の気持ちを言葉にして伝えている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	今年度は新型コロナウイルス感染症対策のため面会制限はあるが、本人や家族の希望を受けて、面会出来る支援につなげている。また、電話で話せる機会をつくり、喜ばれることもあった。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	併設の小規模多機能ホームから入所した利用者が多い。施設間の交流や自由な行き来が出来ている。遠方にいる家族や知人から手紙や贈り物が届いた際は、受け取った時の嬉しそうな表情を写真に残し、おたよりにして届けている。	コロナ禍以前は近所の方や友人の来訪が度々あったり、併設小規模多機能型居宅介護事業所の馴染みの方に会いに行くことが多くあったという。また、家族と行きつけの美容院やお墓参りに行ったり、年末年始に外出する方もいたが、現在は感染防止の観点から休止している。そのような中でも手紙や電話でやり取りしたり、利用者の様子をキーパーソンに伝え、少しでも関係が継続できるように努めている。	

グループホームサン・オアシス

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	利用者が、お互いに気持ち良く関わり合い、支えあえるように、席を変えたりテーブルの位置を変更している。気の合う利用者が一緒に食事や入浴、レクリエーションや散歩など楽しんでいる。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	季節の野菜や果物を届けてくれる家族や、近況を電話してくる家族の思いに添い、利用が終了しても、その関係を大事にしている。また、過去に利用した家族が新たに利用申し込みをしたり、利用開始するケースがある。		
<b>Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント</b>					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	利用者のほとんどが、自身の思いや希望を伝えることが出来ている。日々の生活の中で会話を重ね、その思いを表出する機会となっている。表情や動作からも確認できている。職員は情報交換し、希望に添えるよう努力している。	ほとんどの利用者が思いや意向を表出できるため、日々の関わりや表情、仕草からも読み取るようにしている。新規利用者については必ずしも事前の情報通りでないこともあるため、日ごろの対応の中で意向を探るようにしている。また、日々接する中で新たな発見や発言が見られた場合には「にやり・ほっと」カードに記録し、ホーム便りでも紹介するようにしている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	個々の歴史や暮らし方、生活環境、サービス利用の経過について、出来るだけ情報をいただくように努めている。日々の暮らしの中で、本人から教えていただくことも多い。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	経過・ケア記録やケアチェック表は一日を通して記入している。記録から生活の様子や心身の状況が把握出来る。センター方式でできる・できないシートの活用もしている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	介護計画の作成はケアマネージャーが中心となり、利用者、家族から意見、希望、要望を確認している。ケアカンファレンス時に、全スタッフの意見を確認して計画に反映している。緊急な対応が必要な場合には、状況に応じた計画に修正している。	一人の利用者を複数の職員で担当しており、毎月のカンファレンスでモニタリングをしている。介護計画の短期目標は3ヶ月、長期目標は6ヶ月に設定して、利用者や家族の希望、センター方式でのアセスメント、モニタリング結果などを基に見直しをしている。また、利用者の状態に変化が見られた場合や新規に入居された場合は随時見直しをしている。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	職員はケアの実践の中で、利用者の言動などから気づいたこと、工夫したこと、次のケアにつなげたいことを個別の経過・ケア記録やケアチェック表に記録している。記録は職員全員が目を通して、他職員の記録からも情報を共有して、実践や介護計画の見直しにつなげている。		

グループホームサン・オアシス

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	利用者、家族の状況に応じて、必要な支援は可能な限り実施している。家族からの依頼を受けて、認定調査の申請、病院受診、不足品の購入等を実施している。季節に合わせた衣類や寝具の準備等、利用者の生活支援が出来ている。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	地域の民生委員やボランティア、ご近所など、多くの力を借りて、楽しみのある暮らしの支援が出来ている。ボランティアの方の参加は新型コロナウイルス感染症対策のため、中止している。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	かかりつけ医は利用者や家族の希望で決めている。多くは利用開始前からのかかりつけ医を継続している。家族等からの依頼のある場合は、施設の協力医を紹介している。インフルエンザ予防接種や症状の変化に応じて、往診の依頼や看取りの協力体制を整える等、かかりつけ医との連携に努め、支援に当たっている。	新規契約時にそれまでのかかりつけ医を継続できることを伝えている。多くの利用者がかかりつけ医を継続しており、数名は協力医を利用している。かかりつけ医への受診は基本的には家族対応であるが、様々な事情で難しい場合もあり、職員が受診の付き添いをすることもある。その際は受診結果を施設長を窓口として、家族へ伝えている。施設長が看護師ということもあり、利用者の健康管理や医師との連携は図れており、併設小規模多機能型居宅介護事業所にも看護師が2名在籍しているため、医療面での安心は担保されている。また必要に応じて協力歯科医の訪問も可能となっている。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	看護師は常に利用者の健康管理や状態の変化に対応している。職員は体調の変化に気づいた時は、ただちに看護師に報告している。併設の小規模多機能ホームの看護師の協力は、支援を充実させている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院に際して利用者の情報提供をしている。入院中は面会の支援により利用者の不安にも配慮した。スムーズな退院支援を、地域連携室や家族と連携を図りながら最大限努力している。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	重度化や終末期のあり方は、サービス導入時に本人、家族に確認している。また、その時々状況に応じての意向を確認して対応している。看取りを希望する場合は、主治医と連携して協力を受けられる体制を整えている。最後の時は、家族等の見守る中で迎えられることを念頭に職員一同で支援している。	法人として重度化や終末期に関する指針があり、入居時や身体状況に変化があった場合に利用者や家族に説明し、同意を得て書面に残している。開設より19名の方の看取りを行い、その都度、職員に事前研修をしたり、情報共有や指示出しをし、家族も職員も安心して看取りができるように努めている。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	緊急時対応マニュアルに沿って、施設内学習をしている。実際から、吸引器の準備と使用方法までを学ぶ機会があった。AEDの設置に併い、消防署の職員から取り扱い方法を学んだ。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	避難訓練は併設の小規模多機能ホームと合同で年2回、夜間の想定で実施していた。今年は新型コロナウイルス感染症対策のため、合同での避難訓練を中止し、当施設のみで初期消火の対応、消防署への通報、利用者の避難方法等を確認しながら実施した。	今年度は新型コロナ禍のため消防署員の立ち会いは行わず、夏と冬にホーム独自に地震と火災想定で実施し、通報訓練や初期消火、避難誘導の手順を一つ一つ詳細に確認したという。申し合わせ事項として災害時には地域の方を受け入れることになっており、昨年10月の台風被害の際には地元に住む職員家族や併設小規模多機能型居宅介護事業所の利用者を避難所として受け入れた。また緊急時対応マニュアルや緊急連絡網が整備されており、3日分の水や食料、オムツ類の備蓄も用意されている。	
<b>Ⅳ. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援</b>					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	プライバシーに関わる時は、周りに聞こえないように話しかけている。言葉がけに注意を払っている職員が多い。車椅子を利用している場合は同じ目線に心がけて対応出来ている。職員は、言葉がけや対応について話し合い、お互いに注意し努力している。	理念の中に「人権」や「尊厳」が謳われ、スタッフ会議の中で権利擁護について学習したり、スタッフ同士注意し合ったりして、人権意識を高めている。利用者に対する呼び方は一律ではなく、あくまでも本人や家族の希望の呼び方で対応している。また、異性の介助を嫌がる方には同性で対応し信頼関係を築くようにしている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	利用者の多くは、日常的に希望や意思を伝えることが出来ている。毎日の食事や誕生日の際には、利用者の好みのものを聞き取り入れている。希望を表すことが難しい利用者は「はい」「いいえ」で答えらる質問にする等、工夫している。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	朝、起床できず、毎日遅れて食事を摂っている利用者に温かな食事を準備している。落ち着いた利用者に寄り添い、話を聞いたり散歩に出ている。施設の暮らしに基本的な流れはあるが、利用者のペースを見守りながら対応に努めている。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	その日の気分で、自分で決めて身支度をしている利用者がいる。介助が必要な利用者にはどちらが良いか選択してもらい決める事もある。季節に合わせた衣類を選べるように、クローゼット内を整理する支援をしている。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	好みや苦手なものを確認して、食べられない物は別の物に変更している。食べやすさやむせないことに配慮し食事形態を変えている。テーブル拭きや、お盆拭きにも取り組んでいる。おかわりを希望し食事を楽しむ姿がある。職員は残さず食事をしてもらったことに感謝の気持ちを伝えている。	ほとんどの方が自力摂取できるが、見守りや一部介助の方もいる。食事の形態は利用者の状態に応じて刻みや軟らかめにしたり、トロミをつけたり、疾患の関係で量の調節や食材の選択をしている。献立は食事担当の職員が作成し、近所の方からのおすそ分けやホームの畑で収穫した野菜も取り入れてメニューとして提供している。また、利用者には力量に応じて食材の下ごしらえやテーブル拭きなどの役割があり、やしよま作りや繭玉作りなどを楽しむ機会もある。誕生日には本人に希望を聞き、お寿司などをテイクアウトしたり、敬老の日にもお寿司を注文して提供し喜ばれている。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	利用者の希望を確認し、咀嚼や飲み込みの状況に合わせて食事の形態を決めている。利用者の状態により、水分摂取量を記録している。食事摂取量の記録は欠かさずに行い、健康状態の把握と支援につなげている。		

グループホームサン・オアシス

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後の口腔ケアは義歯の洗浄を含めて、利用者の出来ない部分を補うようにしている。歯ブラシ、くるりナブラシ、歯間ブラシ、歯磨きティッシュなど、状態に合わせて使用している。口腔ケア研修を受けて、ケアの重要性を学んだ。歯の治療は利用者の状況により、歯科医の訪問、協力を得ている。		
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	自分でトイレに行く利用者が多い。布パンツを使っている利用者もいる。支援の必要な利用者は、その行動や排泄パターンの確認により、タイミングの良い排泄につなげている。	利用者の自立度は様々だが、リハビリパンツにパットを使用している方が多く、若干名の方以外はトイレでの排泄をしている。職員は排泄パターンや排泄チェック表、利用者の仕草などを基にトイレでの排泄を支援している。また、排泄用品については随時家族に相談し、利用者にとってより良いものとなるように検討している。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	水分摂取は起床時から一日を通して不足しないように心掛けている。毎朝食にバナナを取り入れている。おやつは乳製品や水分摂取に心掛けている。排便の確認および記録と下剤の調節をしている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている	入浴は利用者の希望を確認して、気分や体調に配慮して行っている。清拭、シャワー浴、洗髪など状況に応じた支援が出来ている。入浴支援に時間と複数の介護者が必要になり、全員が毎日入浴することは出来ないが、利用者の希望に配慮して支援している。入浴の声掛けに嫌がる利用者も湯に入れば喜ぶので、一度断られても時間を置き、すすめている。	入浴回数は利用者の状態や希望に応じて、週3回の入浴を基本としているが、毎日入浴される方もいる。ユニットバスのため、立位が取れなかったり、下肢の可動制限がある利用者にはシャワー浴で安全に対応している。例年であれば近くの温泉で足湯を楽しむ機会があるが、今年度は新型コロナ禍のため中止し、菖蒲湯やゆず湯、バラ湯など、季節の湯を楽しんでいる。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	自由な休息の時間が過ごせるように、利用者の希望に添い、支援している。室温等の室内環境や寝具の調節と清潔に配慮している。夜間は利用者の希望により、室内の明かりをつけたまま就寝してもらうことで、安心と安眠につなげている。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	個々の利用者が服用している薬の説明書は、ファイルにまとめて、いつでも確認できるようにしてある。服薬状況、薬の変更や追加は記録して全員が確認出来ている。誤薬の危険性に対応して、声だし確認をしている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	「カーテンの開け閉めが私の仕事だよ」と家族に話す利用者や、広告でゴミ入れを折ってくれる利用者がある。食堂のホールではYouTubeを利用して演歌を一緒に歌う楽しみがある。		

グループホームサン・オアシス

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	外出支援は新型コロナウイルス感染症対策のため中止していた。施設の庭で、お花見、日光浴、散歩、お茶会、シャボン玉遊び等を工夫した。また、畑の作物の成長や収穫を楽しむ機会を支援した。	日常的にはホーム周りの散歩をしたり、畑で野菜の収穫作業をするなど、外へ出る機会を作っている。例年であれば年間の外出計画に沿って花見や人形博物館の見学、お楽しみ外食などを行っているが、今年度は新型コロナ禍により一時休止している。そのような中でも直近では事前に下見で密にならないことを確認してから、隣村の公園へ外出して気分転換を図った。また、普段外出できない代わりにホーム内でミニ運動会やリズム体操、カラオケを行うことによって、利用者のストレス発散と身体機能の低下を予防している。	
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	お金を管理して、甥や姪に小遣いを渡すことを楽しみにしている利用者がいる。「お金がない」と困っている利用者には、金庫に預けてあることを説明し、不足な物、必要な物の有無を確認している。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	敬老の日や誕生日に届く手紙やお祝いを嬉しそうに受け取る姿がある。希望に添い、電話で家族と話ができるようにしている。利用者が作成した年賀状を家族に送り、家族から感謝の言葉があった。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	食堂ホールでは多くの利用者が一日の大半を過ごしている。天窓からの陽の光が明るく、裏庭が広がり、開放感のある空間となっている。つるし雛や干支、四季に合わせた飾りつけをしている。ベットにもなるソファや畳コーナーで居眠りをしたり、昼寝をしている。TVを観て、気の合う人と話し、食事の献立表を見る楽しみのある場所になっている。空気清浄機を置き、室温や温度にも配慮している。	食堂は天井が高く、外からの採光も良く、開放感がある。壁にはアクティビティーで制作した作品が飾られていたり、季節の花が生けられている。空調はエアコンとパネルヒーターで管理され、パネルヒーターだけでも暖かさが感じられる。トイレは3ヶ所あり、車いすで利用できる広いトイレは2ヶ所ある。また、浴室はユニットバスとなっており、パネルヒーターと電気ストーブでヒートショックを防いでいる。全体的に清掃が行き届いており、清潔感があり、臭気を感じることはなかった。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	ホールで過ごす席は、利用者の希望に配慮している。家族の要望がある時、利用者間での関係で席を替える時は、カンファレンスで話し合い決めている。気の合う利用者が出るだけ一緒に過ごせるように、テーブルの位置にも配慮している。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	思い出の写真や置物等が置かれている。好きな動物や演歌歌手のポスター、ぬいぐるみを置くことで会話が增えている。枕元に沢山の本を置き、読んでいる利用者や好きなスポーツをラジオで聴いている利用者がある。思い思いの過ごす場になっている。	各居室にはベッドと洗面台が設置され、エアコンとパネルヒーターで空調管理している。基本的には持ち込みは自由となっており、自宅で使用していたタンスやテーブルがあったり、仏壇や家族の写真、愛読の雑誌が置かれている居室もあり、生活感を感じることができた。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	利用者の身体状況に合わせて、安全で使いやすいように、トイレや浴室の手すりの増設、畳コーナーをフローリングに変えている。トイレに案内表示を貼り、利用者に分かりやすく迷わない工夫をしている。車椅子の運転を妨げないように、障害物となるテーブルや椅子の位置に配慮している。		